

哲學研究 第二百十三號

第十八卷
第十二號

非人稱判斷に就いて

下 程 勇 吉

- 一、非人稱判斷とは何か
 - 二、非人稱判斷は命名判斷であるか
 - 三、様相の範疇としての存在
 - 四、アレンヌノに於ける存在判斷
 - 五、非人稱判斷のノエシスの性格
 - 六、無主語説
 - 七、作用と内容
 - 八、内容とノエシスの全體としての實在
 - 九、非人稱判斷の主語
 - 一〇、非人稱判斷の主語と述語
 - 一一、直接體驗界の分裂
 - 一二、存在を示す非人稱判斷
- 非人稱判斷に就いて

前 書

私は嘗つて低次の對象と高次の對象との關係を問題として現象學的自我と先驗的統覺との關係に導かれ、哲學研究百七十一號抽稿此の問題をデカルトの *cogito* を媒介としてカントの内官と統覺の關係に於て考へ、内官の多様を永遠の立場より必然化するものとしての統覺そのものの地盤として能産的根源的自然を問題とした。

(哲學研究百九十五號百九十七號百九十八號) 併し、かゝる試みは *natura naturance* を背景とする永劫の相よりの觀想の立場に立つものであるのみならず、その根源的自然の内容的分析に於て盡さざるものがあつた。前の論文に於て自覺作用から出てノエシスの自然に達した私は、今度は言語的表現を媒介にして前とは逆の道を辿るに到つた。もとより此の論文は判斷論が中心問題をなしてゐるが、以前の論文と次の論文との聯關を省みるとき、かくの如く云はれると思はれる。上述の如き逆のコースが可能なるためには永劫の相よりの觀想の立場を超出することが要求せられる、かゝる行論の出發點をなすものとして、我々は非人稱判斷の問題を考へて見たい。

一、非人稱判斷とは何か

ロツツエは其の判斷論を展開するに當つて他の如何なる判斷よりも先なるもの

として、非人稱判斷を取上げて論じてゐる。(Lotze, *Logik* S. 69 — S. 70) 此の特色ある考へ方は我々にとつても深き關心に價ひしてゐる。此の判斷を基ける世界は實に他の一切の判斷に對する基礎的地盤をなすと考へられるからである。

言語的文法的に非人稱判斷は次の如く特色付けられる、即ち此の判斷は單數三人稱の一般に性別なき(もし性別あるときは中性の)動詞を賓辭とし、明確なる限定的意味を示す語の代りに單數の中性代名詞を主語とする判斷である。規定的なる主語を缺ぐの故を以て此の判斷を表はす命題は無主語命題とも呼ばれる、而もそれは分肢せられたる意味内容を云ひ表はしてゐる。これは主として印歐系の國語に多く見るところの表現形式であるが、主語を缺ぐこと多き邦語に於ても、かゝる判斷と同一の部類に内容上屬すると考へられるものは少くないであらう。

今主として獨逸語に於て非人稱判斷の表はす内容を擧げて見るならば大體次の如くなるであらう、自然現象、天候 (*Es regnet*)、具體的知覺 (*Es rauscht*)、集合的經過 (*Es entstand*)、*Laufen und Durcheinanderrennen, allgemeines Begrüssen und Handesschütteln*)、身體又は精神の状態 (*Es hungert mich, Es schwindelt mir*)、迫つて來る力の作用 (*Es schüttelt mich*)、祕密的なるもの又は幽靈めきたるもの (*Es spukt*)、一般的なる成り行き (*Es geht mit dieser*

Sache wie mit der andern. Es steht damit besser.) 存在 (Es gibt ein Buch.) 缺乏又は反對 (Es mangelt an Geld.) 以トヲシロシヨ (Subjektlose Sätze, 1883) シグワルト (Die Impersonalien 1883) 等に依る。

註 邦語に於ては本多謙三氏の勞作「非人稱判斷に就いて」―思想第六十三號所載―が此の方面に於ける唯一の文献である。

二、非人稱判斷は命名判斷であるか

規定的なる主語を缺くと云ふ特色ある言語的形式の故に、此の判斷は判斷論に於て幾度か問題にせられてゐる、その中根本的對立をなすものは、無主語説と有主語説とである。前者によれば、此の判斷の論理的核心理は述語に存し、主語は空虚なる形式的なる語に過ぎない、之の立場の代表者としてミクロジヒが擧げられる。後者に據れば主語は假令暗黙裡にもせよその指示すべき主體を有し、此の判斷も一般の判斷の如く双肢的構造を有する、かゝる見地に立つものにシグワルト、プエンダーがある。先づ後者のうちシグワルトの見解 (Die Impersonalien 1883) を吟味することより我々の考察は初まる。

先づシグワルトに據れば判斷は綜合判斷と命名判斷とに二大別される。事物と其の屬性との統一としての綜合判斷は次の如き構造を有する、即ち例へば「黄色の葉」

と云ふ「分裂なき全體者」を要素に分裂せしめ、それを「葉」として定立し、更にそれより「黃色」と云ふ色を思想に於て抽出し、他の要素と再び結合して、「此の葉は黄である」と斷じて我々は「全體的統一的直觀」を云ひ表はす、之が綜合判斷に外ならぬ。(S. 15 | S. 16) かゝる判斷に對して、命名判斷は現存するものと既知表象との再認的一致を表はすものである。(S. 14 | S. 10) ジグワルトはかくの如く區別せられたる意味に於て非人稱判斷を命名判斷と斷定するのである。

即ち非人稱判斷の主語は述語に依つて命名せらるべき當のものであつて決して空虚なる形式語ではない。一義的なる言語的内容規定を示してこそゐないが、主語は其の時の全狀勢よりして直ちに相互の話者に領得される「分析されない全體的表象」である。之は委曲を盡せば云ひ表はされるが其の必要な程に直接知られるものである。かゝるものを其自體述語に於て命名するものが非人稱判斷である。即ち直接に知られる性質又は働らきを、それを生ずる又はその歸屬すべき主體又はものとの關係なしに、夫を命名するのが非人稱判斷である。(S. 29) *Es hungert mich.* と云ふとき、飢それ自身が云ひあらはされるに止まり、それを惹き起す動因としての主體は全然語られてゐない、このことは正しくジグワルトの論ずる如くであるが、併し

それは「現存の印象」を命名することであるか。

他面ジグワルトに依れば命名判断は存在判断と區別される。此の見解は如何なる歸結を將來するであらうか。命名判断は存在判断と全然逆の過程を辿つて成立する。既述の如く前者は所與の直觀的個別的對象を既知表象に依りて再認するものであるが、後者にては內的なる既知表象に個々の知覺される物が對應するか否かが問題である。ジグワルトは一應かく存在判断と命名判断とを區別するが、此の區別は、非人稱判断を以て命名判断とする見解を貫かんとする時、如何なる程度まで實質的に維持されるのであらうか。我々は既に存在を表はす非人稱判断を知つてゐる、それに就いての彼の所説は次の如くである、*„Es sieht“* は唯、それに續く語の普遍概念に下屬する實在的客體をあらはす、その語は所與のものを命名する賓辭としてはたらく^o (*S. 68*) *Es ist, es war ein A* と云ふ形の存在判断は與へられた實在するものを命名する非人稱命題と同一の部類に歸する。^o (*S. 66*) 併しかくの如き形の判断は命名判断であらうか、此の時主語は述語としてはたらく普遍の *Exemplar* に止まるであらうか、寧ろ主語が述語を包むのではないであらうか。命名判断は普遍を以て特殊を包攝するものとしてカントの語を借りれば分析判断である。しからは *Es sieht* の

形をとる存在判断は命名判断であり、従つて分析判断的であらうか。ジグワルトは存在判断をカントに依つて考へてゐると思はれるがカントに於ては存在判断は如何に考へられてゐるであらうか。

三、様相の範疇としての存在

存在判断に於ける賓辭があるは決して「實在的賓辭」ではないとカントは考へる。それは對象自體の屬性でなく、單にあるもの又はある規定自體の^{ポジチオン}措定に過ぎない。それは先天的概念的に考へられたるものが後天的經驗的にも與へられることを示すものである、即ち「可能的認識一般の一般的制約に一致するもの」としての概念が亦「全經驗の脈絡コンテクストに含まれるもの」として示すことが、存在判断に外ならない、かくて存在は概念に對する「關係賓辭」としてはたらく様相である。存在は概念に對象を措定し其の實在性を表示するが、可能的概念の内容に何物をも加へるものではない、唯、概念の認識能力に對する關係を示すに止まる (Vgl. K. d. r. V. B. S. 626—S. 629)。

かくの如く存在を判断の様相と考へる立場に於ては、概念による先天的綜合が中心的意義をもつてゐる、存在は概念が經驗に於て其の對應を見出す關係として第二次的位置を占めるにすぎない。しかしかくの如く存在判断を綜合判断の Annex と

考へることは、先天的綜合に依りて成立する普遍概念の優位又は完結的所與性を假定してゐる、即ち先天的概念は *positiv* なる普遍として成立し、それが現實的なる特殊を自己のもとに包攝する時、様相の判断として存在判断が成立する、かく考へる時、既知の普遍をもつて特殊を包攝するものとして、存在判断は命名判断とも云ひ得るであらう。事實ジグワルトは、事物の存在が問題になるのは内的記憶心像單なる表象がありてその現存的直觀が缺如してゐる時のみであると云つて、既知表象の再認的綜合に於て成立する存在判断をあげてゐる。(Impersonalien S. 51) 併し本來の存在判断はかく回顧的再認的にのみ成立するのであらうか、それは何等認識内容を富ますことに貢獻せぬものであらうか。むしろ存在判断のあるもの、別して非人稱判断の形をとるものは、新らしきもの「ものに突き當つて開けて來るもの」を我々の意識に示すのではあるまいか。存在は既成の完結的概念より特殊に下り來る如き超越的關係であらうか、むしろ所謂存在こそは我々が行住坐臥接觸し交渉する實質的なるものではあるまいか。實にジグワルトと對蹠的見地に立ちて非人稱判断はかへつて存在判断であると考へる立場さへ見出されるのである。

四、ブレンタノに於ける存在判断

模寫說又は素朴實在論を先驗統覺の普遍的必然的綜合に依りて超克せんとするカントが概念の客觀性を重んじてその超越性を説くは極めて當然なる歸結である、そのとき存在は第二義的のものとなることも亦免れなかつた。「存在はカントにとつて常に判断の連辭としての存在であつて存在的存在ではなかつた、一般にカントに於ては存在の概念は對象の存在に何物も加へない、様相の範疇は認識の存在價值を表すものであつても存在の様相を規定するものではなかつた。」(山内博士「存在の現象形態」一五一頁) 客觀性を先驗統覺の綜合にのみ求めんとする限り、存在は様相の範疇として貶黜されるか、思念し得るも認識すべからざる「理念」として敬遠されるかの外はない。かく貶黜敬遠せられた存在を眞正面よりとり上げて一切の判断を存在判断に歸せしめんとするものに布伦タノがある。(Brentano, Psychologie

Bd. II)

すでにカントに於て存在は「後天的なるもの」への關係を含んでゐたのであるが、布伦タノは自立的意味の存在を斥けて個物の存在に一切の判断の基底を見んとしてゐる。カントの存在についての見解を中途半端であると考へる布伦タノは判断に關して次の如く考へる、判断は表象された徴表の分離又は結合ではない、今、Aが

ある」と云ふとき、之はAに「がある」と云ふ徴表を賓辭として結合することではなく、A自體を承認することである。(S. 49) 併し彼の所謂「承認する」とは價值判斷の意味に於て云はれるのでなく、あるものの存在を直下端的に認めることに外ならない、従つて個物の存在を直下に認める知覺も判斷である。(S. 50) アリストテレスに依れば思惟の眞理性は事物と其の思惟との一致に存するが故に、單純なる對象の認識は徴表の結合にあらずして單なる思惟知覺(接觸 *symploche*)である。(S. 54 Amkg.) かくアリストテレスを援用するブレンタノはすべての定言判斷は存在判斷に歸することを説く。「ある人が病氣である」とは「ある病氣の人がある」と云ふに等しい(S. 56) と考へてブレンタノは連辭である「を存在」があるに歸せしめる立場に立つ。

カント的なる先驗的觀念論的立場にては存在(がある)は連辭であるの背後に退き、ブレンタノの經驗的實在論的立場にては存在が連辭を吸收する。カント的立場を徹底せんとするときには、存在よりも意味が先である、即ち存在よりも判斷が根源的であると考へられるが、知覺こそ判斷であるときへ考へるブレンタノは一切の判斷を存在判斷に還元せんとしてゐる。カント的立場は意識に於ける *Schein* より出て其對應者を外なる經驗に於て見出さんとするが、ブレンタノは意識が自己の外なる

Dasein と「接觸する」ところに思惟が成立すると考へる。前者は *letzte* なる概念を内に、後者は *letzte* なる個物を外に、假定してゐる、そこに内なる意識と外なる物とは峻しい對立をなしてゐる、かゝる平面的對立の上に成立する關係は稍、もすれば摸寫說的となる傾向を有してゐる、我々の體驗する直接界はしかく内と外、*Sosein* と *Dasein*、心と物との原理的乃至運命的なる對立的溝渠を有するものであるか。更には存在する物は個別性を超えることを得ず、普遍的なるものはそれ自身完結性を有し存在に對しては血が通つてゐないのであらうか。

非人稱判斷の究明はかゝる問題に幾分の光を投げるであらう。又それを言語的表現的なる媒介として我々は直接體驗界へ反省の歩みを進めるであらう。¹⁾

註 (1) *Erkenntnis* の形に於ける非人稱判斷につきては一二參照。

五、非人稱判斷のノエシスの性格

我々は上來存在の問題を論じながら、直接體驗する世界が峻しき對立に於て内外の別をなすか否かと云ふ問題に達した、之の問題を考究することに依りて存在の問題も解決の鍵を見出すと考へられる。先づその問題を考究するために我々の體驗に最も直接なる判斷が取上げられる。かゝるものとして身體・精神の状態を示す非

人稱判斷がある、(Mich durchhet. Es gefällt mir. Es schwindelt mir.) 更には個人の肆意に依りて左右せられざる現象即ち天候或は生命表出 (Lebensäußerung) を示すものがある、(Hier schläft sich's angenehm. Es ist kalt.) 此等の判斷に表現されるものは、主觀の肆意にては如何ともすべからざる程の力をもつて押し迫つて來る最も直接なる現象である、それは常住坐臥日々刻々我々が生きる現象に外ならぬ。もとより非人稱判斷は知覺そのものの立場ではないが、我々に最も近き體驗のロゴスとしてノエシスの性格¹⁾を有してゐる。ロツツエが暗示した如く、寒さの餘りがたゞふるへるのは身體的狀態の單なる表徴である、併し「寒さ」(Es ist kalt)と云ふときは明かに思惟作用が行はれたのである。(Logik § 48) 天候、身體的狀態、感情等の如く、主觀の肆意にて支配されざる而も我々の心身をノエシ的に貫いて迫り來る存在の最も原始的にして端的なる表現が、非人稱判斷に盛られるのである。それは存在或は根本現象の最も直接なる自己告白である。それは體驗又は知覺そのものの立場ではないが、それに深く根ざして而もかゝるものを超えてゐるロゴスである。かゝるロゴスは其の自⁺かなる超出を存在そのものに動機付けられてゐる。ノエシス的な冷暖自知の體驗より端的に自づと發せられたる聲が非人稱判斷の領域を形成してゐる。かくて

非人稱判斷を基ける地盤は、表象的なる主客對立的構造でなく、體驗的ノエシスの構造を具へてゐる。それは我々に對立するものと云ふよりも、我々を織り込んでゐる現象である。かゝるものはノエマ的對象的に觀られるものでなく、むしろノエシスの作用的に生きられるものである。

我々は今や(二)に於て述べたジグワルトの見解に對して態度を明かにし得るであらう。ジグワルトは非人稱判斷を命名判斷と考へるが命名判斷は既知の普遍を以て特殊を包攝するが如き作用に於て行はれる、そこには觀念性が中軸をなし、存在は第二義的位置を占めるにすぎない、非人稱判斷はかゝる餘裕ある觀照的態度に於て成立するものではない、それは生きたる體驗の構造そのものの端的なる直接表現である。それは生きたる刻下の體驗そのもののロゴスの表現である、かゝるものは普遍に依る特殊の包攝作用に先行する具體的體驗の表現である。このことよりして非人稱判斷が感嘆詞的性格を有することが少くない事實も説明せられるであらう。我々は非人稱判斷に於て既知概念を再認すると云ふよりも寧ろ「突き當つて我々に開けてくる」ものに面するのである。かくて非人稱判斷は他の如何なる種類の判斷にも還元せられざる判斷として其自身獨自なる領域を成してゐる。

註 (1)此の章のノエシス的なる語は内容と作用とが一如に化してゐることを指す、七參照。

六、無主語説

非人稱判斷にてはノエシス的身體的感情的なる状態が直接に把へられる、それは主客の對立を表面に出すこと最も少き判斷である。Es rauscht. Es lautet. と云ふ時、音が聞えるのか、私が、聞くのか、その何れでもなく、唯聞えるのである、響くのである、何がと云ふ主語的限定なき世界がそこに横はつてゐるのみである、此際「はたらき」がそれ自身純粹に捉へられてゐる丈で、それを惹き起す規定的なる主體は考へられてゐない。かゝる非人稱判斷にては述語に云ひ表はされる現象又は性質が意識の全面を彩り盡し透過してゐる、それを超えてその歸屬すべき背後の主體への *Bezug* は蔽ひ遮られてゐる如き趣を呈してゐる。かゝる點に於ては(二)に言及した無主語説は眞理内容を有してゐると云はねばならない。ミクロジヒは次の如く云つてゐる、「無主語命題にては働らく對象を云ひ表はすことなくして、或る過程又は状態が表現される、それは、働らく對象を知らぬからである、或ひは知覺された現象を云ひ表はせば足りるからである。」¹⁾非人稱判斷の特質は「述語を絶對的に定立し得ること」「主語を述語より引き離し得ること」にある。従つて述語は主語的規定より自由である。ミクロジヒも

云ふ如く、'Auf dem Meer ist's ruhig.' と云ふ時、述語は「無制約に絶對的に」云ひ表はされる、此のとき捉へられるのは海上に於ける静謐そのものである、それに對し 'Das Meer ist ruhig.' にては述語は主語にて限定され、海が靜なのである、即ち他との對立的關係に於て主體が賓辭附けられるのである。

確かに非人稱判斷は「はたらき又は性質」それ自身を絶對的に把へる。かくて非人稱判斷の述語的契機はそれ自身獨立的なる *Wesen* であるが、それは如何なる意味に於いても、主語を缺ぐものであるか。規定的主語がないとは主語を全的に有たぬことであるか。

七、作用と内容

非人稱判斷の述語的契機はノエシス的である、その *Wahheit* を内容と名付けるならば、内容に作用は食ひ込んである、作用は内容(又は素材)の中に生きてゐる。かゝる内容と作用と一に生きるものとして、それは内部知覺とも云はれるであらう、それはノエシス的であり明證的である。かく作用と内容と融合して生きるところ、唯一の全體意識が状態的に生きる、その状態性よりして、かゝる體驗は一般に感情的なるノエシスの側面を有すると特色付けられるであらう、明證的なる内容は常に感情的なる

作用的側面に裏けられてゐる。かゝる内容と作用との融合は身體性に外ならない。身體は常に質料的内容を内から感情的に生きる作用體驗にて貫かれてゐる。非人稱判斷は直接的と派生的の別あるも何等かの意味に於てかゝる身體性に關係してゐる。

作用と内容との融合渾一者としての感情的明證的契機は身體性に於て現在直下の意識の全面に浸透し盡してゐる。それは核も殻もなき純粹なる根本現象である。かゝる述語的契機は刻下の意識を彩り盡すが故に、その歸屬すべき主體より獨立に捉へられると云はれる如く、そこには自己を超える全體への關係は反省的に與へられてゐない。直接的にして感情的なる直接内容は明證的充實的であるが、同時に一面的であり又有限であることを免れない。

註 (1)かゝる意味の内容はフッサールの意味する「内容」と異るところあることは云ふまでもない。又それが原子論的に所謂「感覺」として意識に存在すると云ふのでもない。今の問題は意識に於ける「契機」又は「相」の分析的記述に止まる。

八、内容とノエスの全體としての實在

非人稱判斷の述語的契機は作用化せる内容として直下の意識に於て明證的である。かゝるものは如何にして有限であると云はれるのであるか。單にそれ自身透

明であるのみならず、かゝる明證的契機を押し流し分裂せしむる根柢ありてこそ其の有限性も成立するのではあるまいか。述語的契機の有限性を語つた我々は、今や其の有限性を成立せしめる地盤そのものの考察に導かれる。

現在の瞬間に於て明證的なるものは次の瞬間にはノエシスの根柢より湧き上るものに依つて押し流され其の意味が變へられる。内容と共に生きて現在の明證的契機をなす作用はつねに内容に基けられ、而て其内容はその質料性に依つて無限に湧き出るノエシスの全體に通じてゐる。現在の明證的契機は常にかゝるノエシスの全體に依りて押し流され有限化される。かく述語的契機を有限化するものは根源的自然の無限なる生産性であると云はれるであらう。それは現在の底にひそんでゐるノエシスの全體である。かゝるノエシスの底より湧き出る全體は、その弾力性と生産性とに依つて、現在の充實的象面を絶えず新たに現出せしめる。今此處に於ける直接なる内容は根源的全體に依つて押し流され意味を變じ、無限に異なる現在の内容として生きる。かくて述語を超えるものは、述語自身の底にひそみ、そこより無限に湧き出して來るのである、それは現在の内容を以つて如何ともすべからざる全體である、却つて現在の内容を動かす根源的なる力を伴つて追つて來るのであ

る、非人稱判斷の中に「Es schüttele mich.」の如く Gewalt をその作用 (Wirkung) に依りてあらはすものがあるとミクロジヒの語るものは、偶々此の間の消息を示すものと云へやう。非人稱判斷の述語的契機は直下端的なる意識の象面に生き乍ら、その底に於てそれを超える全體に接してゐる。かくてそれは「單に主觀的なるもの」ではない。

腹が空くのは私の最も直接なる状態であるが、現在かくなる所以のものは肆意にて左右すべからざる超個人的現象に根ざしてゐる。ミクロジヒの云ふ如く、それは「非肆意的なる生命活動の表出」である、「Ich friere. Man friert. Man friert.」といへば一定又は數人の人が凍えるのであるが「Es friert.」と云へば特殊の人に限られざる而も肆に左右せられざる經驗を表はす。内から作用して内容を生き乍ら、しかもその底に作用化し盡されざる全體的存在が潜んでゐるものは、身體性に外ならぬ。非人稱判斷は何等かの意味で常に身體性に關係してゐる。かゝる身體性を通路としてノエシスの全體に連る非人稱判斷の述語は、全體よりの規制力に基く感嘆詞的乃至間投詞的性格を有し感情的色調を帯びてゐるものが少くない。述語の底にはその根源としての全體者が生きてゐる。一般に存在なる言葉が有限なる被限定的者を意味するとせば、かゝるノエシスの全體者を存在と呼ぶのは妥當を缺くと考へらる。それは「實在」¹⁾と云

ふべきであらう。かゝるものを言語的に暗示するものは非人稱判断の主語即ち所謂「空虚なる形式語」である。かくて述語は Dasein の上から云つて獨立的ではない。註 (1)「實在」なる語は今は暫定的に使用される。

九、非人稱判断の主語

ロツツエは非人稱判断の主語に就いて次の如く考へてゐる、それは定つた (fest) ものでなく不规定的なるものをあらはす、そして主語は述語より範圍が廣い、即ち规定的な述語を超えてゐる、それは一切の現象が述語としてそれに屬し又はそれより現れ出る共通なる主語である、即ちそれは「様々なる形態をとる實在の包括的思想」を示す。(Lotze, Logik § 47—49)

かくて非人稱判断の主語は、それ自身限定性を超えてゐながら凡ゆる述語的规定を生み成す母胎として、有限なる述語的规定を無限に超えてゐる、それは「我々を圍繞する存在の全體性」(Überweg)「我々を圍繞する知覺界」(Prantl)とも云はれる。(Vgl. A. Pländer, Logik S. 205) 既述の如くかゝる全體者は有限的規定性を脱しない存在でなく無限なるノエシスの生産者として實在である。非人稱判断の述語はその直接態に於て或は Sosein よりしてそれ自身獨立的であるが、その根源を實在に負うてゐる

る。ミクロジヒの述語説とロツチエの主語説とは相俟つて全面的見解をなすと云はれるであらう。

一〇・非人稱判斷の主語と述語

かゝる全體者は我々の外に超絶的に存在するものではない、それは我々の内を貫き又我々がその中に織り込まれてゐるノエシスの根本實在又は根本現象である。存在の根本的性格は超絶的に *Ichheit* に存することではない、かゝるものはその存在性が問の前にさらされる。眞に *fraglos* Ja の性格を有する存在はノエシス的でなければならぬ、根源的現象は超越の意味存在でもなく、模寫說的感性的存在でもない、それ等は抽象されたる第二次的存在に過ぎない、眞の存在は随時隨所に直下の體驗に呈露し來るノエシス的なものでなければならぬ。非人稱判斷の主語はかゝるものを示す、それがノエシス的であるが故に、或る種の論者の云ふ如くその時の全情勢よりして直ちに理解せられるのである、即ち言語的に委曲を盡して表現される必要がないものなのである。

作用に化せる内容としての述語的契機と、それを生産し規定する主語としてのノエシスの全體とは直接的無媒介的統一をなしてゐる、かゝるノエシスの全體は心的

であると共に物的であり、内在的であると共に超越的である。かゝる主語と述語との關係は如何なるものであるか。主語は述語の外にあるのであらうか。

邦文に於ける主語なき命題に就いて松下大三郎氏は次の如く云つてゐる、斷句は斷定を表はす一續きの言語である、……斷句について世間一般に誤解がある、それは斷句には必ず主語があると思ふことである、……しかし其れは誤である。……火に觸れて「熱い」と叫び苦痛を覺えて「あゝ苦しい」と叫ぶ類其他、大分お暖かになりました、とう／＼本降りになつて仕舞つた……などといふ類皆主語は無い。事柄に主體が無いのではないが、主體の觀念は事柄の觀念の中に潜んでゐて概念として分化されてゐないから主語を生じないのである。」(改撰標準日本文法、一五—一六頁)

かく云はれる如く述語の底に主語はひそんでゐる。主語と述語實在と意識、内と外とは、相互に獨立なる二者が先づ與へられその上に *undsunmenhatis* に築かれる外的關係に於て、相互に交渉するものではない、兩者の關係は原子論的、外的關係でなく、全體的一如的關係である。外的關係にては關係は項に外から附け加はり、項の特殊性を超えてその上に築かれる、従つてそれは項の可變性を許す。併し上述の主語と

述語との關係においては、項は關係に依りて生き關係は項と生命を共にする、それは項を醸し得ざるものとして内的に體驗される、それは自由可變性を有する對象的な關係でなく可體驗性に於て成立するノエシス的な構造である。既述の如く非人稱判斷は常に身體性に關係を多かれ少かれ有つてゐる、身體性の特色の一は内容を作用として生きることによりて内容間の構造を内より體驗し得る所にある。身體は一面物體性を有し乍ら、かゝる内面的關係が體驗されることに依りて、純粹なる物體より區別される。かゝる關係は思惟主觀に依りて構成されて對象界に投入される如き觀念性に於て成立しない、それは體驗を縫ふて働き内より直觀せられる實在性を有してゐる。身體はかゝる構造體驗の場面である。内容が作用的に生きる明證的充實契機と、その底なる生産的ノエシスの全體との内面的關係は身體に於て直接的に體驗せられる。

既述の如く非人稱判斷の主語は述語を無限に超えてゐる。それは内在的規定的述語を無限に超える超越的無規定的全體者であるが、常に述語の限定性に於てのみ具體的に生きる根源的自由者である。述語の如何なる規定性にも現じつゝそれを無限に越える出入自在者である。如何なる規定性をも育くむ無限の包藏性と、その

規定性を超えて周行する自由とを湛へて、主語はつねに述語の端的なる規定に於て自己の直接なる表現を見出すのである。如何なる限定をも育くむ生産性と、又その何れにも偏執せざる自由とは「自性を空せる全體」の性格である。我々はかくの如く主語としての根本現象を特色付け得るであらう。

主語はかゝる自性を空せる「見えざる全體」を示すものとして「空虚なる形式語」とも云はれる如き言語的表現(⑧)を有してゐる。主語(⑧)は超限定的自由の側から見たものであり、述語は被限定的表現の側から見たものである。茲に非人稱判断の連辭の特異なる性格が明かにせられる。

此の判断の主語と述語とは根源的實在の兩面を示すものとして唯一なるもの動と靜との二面をあらはすと云はれやう。無限に述語の特殊的规定性を超え而もそれを産み生かす自由に於て、主語は可動性を有してゐる。従つて其の連辭は「絶えず内容的に移行し融合する主語と述語とを形式的に並立するにとゞまる」と記述される (Lojze, Logik, § 48) かゝる連辭の性格こそは非人稱判断が一定の定言判断に先行し命名判断と明かに異なる所以を示すものである。かゝる主賓兩語の移行的浮動性と無媒介的直接結合が非人稱判断に外ならぬ。かくて名付くべからざる全體とし

て自己を空せる主語は自己を述語の相に於て限定し、それに自己を放下して、刻下の意識を色づけ染めるのである。何物にも滯らざる包藏的生動者が、直接に宛らに自己を表現しその肉を得て體を現するとき、明證的なる述語の相が現れる、それは、それ自身獨立に捉へられる性質又ははたらきである。外延的には主語は述語を無限に超える全體であるが、内容的には兩者は相互に移行し融合してゐる。

我々の身體的ノエシスの體驗は常にかゝる根源的なるものに於て生きてゐる、例へば、刻々の呼吸作用に於て氣息は我々に最も近いが、それは他面主觀性を無限に超えてゐる、こゝにも濁れば濁るまゝに澄めば澄むまゝに自づと來りて自づと去る遍きものがはたらいてゐる。かくて述語は *Sogin* から云へば內在的であるが、その存在性を主語の全體者に負うてゐる、述語は主語の刻下の焦點であるが、主語は述語の不斷の根源である。かくて内と外、述語と主語、意識と實在とは無媒介的に一如的に相抱合する。兩者の關係は直接にノエシスの體験されるが、反省せられてゐない、唯彩り盡されたる意識の相が全面的に生きるのである、はたらき又は性質がその主體より獨立に捉へられると云はれる所以である。そのとき内的に刻々展開する、時間の流が主として注目される、その作用化されたる充實的内容の底にひそむ全體者

は、その影を主語⁸に投げてゐるに過ぎない。それは内容を肯定する面より見られてゐる、内容を否定し拘束する面は未だ十分取上げられてゐない。かくてノエシスの全體に否定的者として網をはつてゐる空間は時間に流し込まれてゐる。作用を拘束する内容的全體を貫く空間性は、時間と共に、刻々變移し更新する。¹⁾この世界にては物は者であり、者は物である、即ち身體性の世界である、かゝる世界に於て、非人稱判斷は主語と述語との無媒介的統一として成立する。併し自己を空せる全體と一定に染められたる部分、自由なる主語と限定的なる述語との結合は他面其の分裂的矛盾性を蔽ひ得ない、それは浮動的相互移行的連辭を有する非人稱判斷の辿り行く必然なる移行に外ならない。

註(1)此の點に就きては「哲學研究」一九七號二頁以下の拙稿參照。

一、直接體驗界の分裂

作用と内容とが融合せる明證的なる述語的契機は無限なる實在としての主語の一斷面である、即ち働らき又は性質はそれが歸屬する主體より獨立に捉へられると記述せられ、明證的なる内容が時間の相の下に意識を彩り充してゐる。その限り述語的契機が中心的位置を占め、時間的發展が主として前景に出てゐる。そのとき述

語的契機は瞬間的に光つては消え行く消滅者に過ぎない、而して述語を生む主語も述語の規定を唯肯定しては呑み込み行く如き無性格的なる一面を蔽ひ得ない。一切を無條件的に肯定するものは、却つてその生産せるものに自己を委し去る無力性をその一面の性格として有してゐる。かゝる段階にては直接に體驗されると記述せられる内容實在間の構造的關係(一〇参照)も自覺的に反省されないが故に、非人稱判斷の主賓の無媒介的結合は所謂「自然と意識との夢幻的統一」に過ぎない。此のとき内容と作用とは實在との調和的關係を背景にして融合してゐる。かゝるときは内容實在間の關係は平衡を保つてゐる、即ち内容を拘束し作用を否定するものとしての實在の *Content* は潛勢的である。そのとき内容は作用と一になりて流れ、時間はそれ自身の系列に於て流動發展する。併し、作用化されない全體的内容としての實在が内容を拘束するとき、時間の流動を制止する空間的なるものが現れる。時間は實在の流動的肯定的發展の系列を示し、空間は實在の固定的否定的展開の様式である、兩者は内外一如の身體性に於て抱合しつゝ實在の二面を代表する。身體にては作用と質料との兩面は相抱合して内外一如である、併しその分裂的否定的體驗の一なる痛みは其の時間的連續的なる「性質」を超えて空間的に位置付けられる、茲に明證

的なる *Sosein* を超えて其れに *Dasein* が措定せられるところに、疑ひと誤とがさしはままれるとは、デカルトの早くも指摘せる如くである。かくて直接的明證は分裂的體驗によりて否定せられる、其自身とらへられたる「性質又ははたらき」は外なる物に歸屬せしめられ、内なる時間は一外なる空間に對立するに到る。

非人稱判斷の述語にて捉へられる如き明證的契機は作用と内容とが一に歸し、者が物なる如き世界である、それは刻下の意識を明證的肯定的に「かくあること」*Sosein* を以つて蔽ひ盡す直接性の世界である。かゝる時間的流動の世界が否定せられるとき、空間的超越の象面が現出し、今や *Sosein* の明證性は *Dasein* との乖離によりて脅かされ、物は者と對立するにいたる。物は作用を拘束支配する全體の否定作用に依りて與へられる。

即ち述語的契機の底にひそむノエシスの全體は、作用と内容との融合態としての前者を超え且つ否定する力をもつてゐる。之に依つて作用は規定せられる。このとき「追つて來る力」を表はす非人稱判斷も成立する。自己の根柢に於て働きたらしかも自己との關係が自覺せられざる「追つて來る力」又は否定作用は、直接の意識にとつては「外から來るもの」「對象的なるもの」として投げ出される。即ち内にあり乍らも

透明化し盡されざる全體的なるものは外なるものと感じられる。こゝに内外の對立を生じ、自我は全體者より分立し、世界は我に對立するに到る。かゝる「外的なる」否定作用に反射的にはたらくノエシス的なものが有限なる個人的本能的盲目的自我としてあらはれる。かゝる自我はその有限性に於いて作用を統一する、従つてその志向する範圍も有限である、かゝる有限なる統一作用に依りて自我は一定のまゝ、まゝに於て「實在」を云はゞ切り取り局限し、所謂「物」を定立するのである。もとより自我が物を定立すると云ふことは意識が物を「生産すること」を意味するものではない、唯かゝる定立作用によりてその物の存在の性格が意識に對し浮彫にされるに過ぎない。物それ自らの有する本來の規定に動機付けられて發動する「Unterstreichunge」が所謂定立作用である。物は實質的にはそれ自身の起原を有するが、形式的には意識に對しその存在の性格を自我によりて浮び上らせる。かくて物はノエシスの自然から生れてノエシスを超え外に出る。それは内に發し乍らそれを超えるものとして外なるものである。何等かの意味に於て内より由來せざるものは外なるものとして内なるものに交渉し得ない、と同時に内在化し盡されたるものも亦外なるものとして内なるものに對抗し得ない、内外の關係は共にと云ふ關係である。かくて「共

「の關係に於て内なる意識と外なる物とが對立し、一般の志向的意識の世界が成立する¹⁾。内外一如にして時空一元なる身體性の世界は非人稱判斷の地盤である、そこにては作用は内容を内から貫いてゐる、かゝる世界が明證的作用と直接的內容との融合態より意慾的自我と超越的なる物との分裂境を展開するところ、志向性を特色とする現實の素朴的意識界があらはれる。直接體驗の契機中、質料又は内容は物として定立せられ、以て時間的内容を否定する空間的規定をあらはにするが、作用は外なるものを時間的に統一する自我としてあらはれる。こゝに外と内、空間と時間、物と者との對立があらはれる。身體はかゝる分裂以前の直接なる統一をなしてゐると共に、かゝる統一が破られ二者が對立するに到る轉回點として常に内外の二面を有してゐる。時空一如の統一より物心二元の分裂的對立を生ずることに依り、身體は物への橋梁をなす、即ち物はすべて身體を軸として空間的に與へられるのである、茲にはじめて所謂個物の存在が語られる。

註(1)こゝには精細なる究明が要求せられてゐる、しかしそれは他日の問題である。

一二 存在を示す非人稱判斷

無限なる生産的全體と有限なる述語的規定との矛盾は内外時空の對立を生み、そ

のとき物は者に對立する。「空虚なる形式語」(es)にその影を落してゐる無限なる生産的自然の飛躍的側面としての否定作用に動機付けられて働らくものは、有限なる盲目的本能的自我である。かゝる自我の性格即ちノエシス的な盲目性のノエマ的照應が無限の闇を宿す物の存在に外ならない。かくて、質料的なる自然の無限なる發展を背景にして、その發展が否定せられて一定のまとまりを有するものとして限定せられるところに、物の存在が、我々に對してあらはれるのである。es sichの形に於て存在をあらはす非人稱判斷は語源上、ergehen, hervorbringenの意味を有してゐると云はれてゐる。即ち物の存在は無限に生産的なる動に於て與へられる、而もそれは絶對の偶然性に於て與へられるのである。限定なき自由なるノエシス的自然を示す語(es)は言語學者に依りて「暗示し得るもの」「知られざるもの」「祕密的なるもの」を示すと云はれてゐる、又ギリシヤにてもかゝる主語は天又はツォイスを意味してゐた。存在をあらはす非人稱判斷の主語は、かくて流動的生産的自然を暗黙の裡に示してゐる。

それと共にその述語も、それ自身超絶的に存する *substantivum* なるものを示すものではない。ジグワルトが指摘せる如くかゝる判斷にては「固有名詞にて示される對象の存

在——それは時空的に一定せる所與性を有してゐる——が云ひあらはされないで、(Impersonalien S. 68) 不定冠詞がその存在するものに先立つてゐる。此等のことは、此の判断が出来上れる個物を表はすのでなく、無限に生産的なる自然の底より與へられる個物の意識に對する發現そのものを示すとも云はれるであらう。かくて此の判断はそれ自身獨立的完結性に於いて自存する個物でなく、個物自體の意識に對する出現を物語ると考へられる¹⁾。

かくてノエシスの全體が分裂に依りて時空的に一定のまゝとまりを有するものとして個物が定立され、茲に一般の判断の主語が與へられ特殊判断の世界が開ける。非人稱判断の述語に於てはその歸屬すべき主體なしに、はたらき又は性質、それ自身が捉へられると云はれたが、今や所謂存在をあらはす非人稱判断に於てかゝる「はたらき又は性質」の歸屬すべきもの又は主體が與へられるのである。かくてもものとは、たゞ、主體と性質との關係が問はれるに至る。我々は先づ述語にて考へ、しかる後にその述語の示す性質又ははたらきとその歸屬すべき主體との關係即ち判断に進むことは、屢々説かれる如くである。茲に非人稱判断は特稱判断又は定言判断に移り行く。かくの如くして、トレンデンプルク等が説く如く、非人稱判断は概念と判断

とがその上に展開する基礎をなすと云はれやう。

要之、非人稱判断は命名判断でなく、現象の直接把握である、むしろそれは存在そのものの自己告白である。しかもその存在は意識の外に存する有限なる個物でなく、意識そのものをも織り込んだ生産的なるノエシスの質料的全體である。それは個物に先立つと共に自我性をもその契機として含む内外一如の根本現象である。かゝる「實在」の自己表現的ロゴスが非人稱判断である。従つてそれは主賓間の無媒介的なる直接統一である。その主賓間には分裂なき同一性がその相互移行性(一〇参照)に於て成立してゐる。此のことは判断一般がその目標とする主賓間の自同性の基底むしろ「指標」をなすものと考へられる。茲に非人稱判断が一面に於て、即ち連辭の示す主賓間の内容的相互移行性の故に不十全なる判断として他の判断に發展すべき所以と共に、その無媒介的自同性に依つて一切の判断に先んずるその論理的位置とが理解せられると結論せられるであらう。³⁾

註 (1) 此の區別に於て *Das Bach existiert* 及び *Es gibt ein Bach* の言語的表現の區別が成立すると云はれるであらう。

(2) 之に續く問題は題を改めて論ずることとし一應こゝで結論としたい。